

[とよなか山田会ニュースレター]

文化と芸術を愛する人びとの集い

2023.10.10

8

豊中市名誉市民・映画監督



とよなか山田会HP

山田洋次氏に エールを送る

●編集・発行／とよなか山田会 ●代表／武市 進 ●〒561-0894 豊中市勝部1-1-7 TEL／080-3868-2010
●facebook／toyonakayamadakai.com ●メール／info@toyonakayamadakai.com

●2023年8月24日 「こんにちは、母さん」豊中市先行上映会



令和5年8月24日に、豊中市立文化芸術センター大ホールで、山田洋次監督の「こんにちは、母さん」の先行上映会が開催されました。チケットは、予約開始日の当日午後2時過ぎには全て完売という人気でした。本作品は、山田監督の90作品目ということです。始めに長内豊中市長のご挨拶があり、作品が上映されました。

9月1日に「徹子の部屋」で、山田洋次監督と吉永小百合さんが出演されましたが、山田洋次監督は、毎回、新しい映画が完成するたびに、裁判所で判決を言い渡される被告のように、ドキドキしながら評判を気にされていると話されていました。

10月20日(金)には、「とよなか山田会 Presents」として山田洋次監督・吉永小百合主演の「母(かあ)べえ」が上映されます。

これからも、過去の作品も含めて、豊中市名誉市民である、山田洋次監督を応援させて頂きたいと思います。

とよなか山田会 代表 武市 進

山田洋次監督最新作

「こんにちは、母さん」

© 2023 「こんにちは、母さん」製作委員会 ◆9月1日（金）全国公開

豊中市 先行上映会 満員の会場で開催!!



こんにちは、
母さん
Mom, Is That You?!



感想

誰の悩ましい日々にも、新たな出発がある

高田 昇さん ●大阪市生れの都市プランナー。大阪府立住吉高校卒・
京都府立大学林学科中退・神戸大学工学部卒。
立命館大学名誉教授 (株)サルトコラボレイティヴ顧問



物語はお母さん、息子、孫のどこにでもありそうな日々、三者の関係から始まります。母は下町で割烹着をきて、困っている人を物心両面で応援する地味だけど存在感のある生活を送る日々。息子は、大会社の人事部長で神経をすり減らす日々。孫はお父さんと馴染めない状態。どこにでもありそうな世界です。そんな日々が緩やかに変わっていきます。息子は身の置き場がないまま、お母さんのところへの出入りがだんだんと増え、会社に居づらくなる。母さんはボランティアで知り合った牧師に惹かれて、いつの間にか艶やかなファッションでイキイキ。母の暮らし、変化もあり息子は見失っていたことに気づかされていきます。

離れ離れだった家族が、緩やかにいつの間にか繋がっていくことが伝わります。激変がないだけに、自然とスクリーンの世界に入り込んできたことに、後で気がつきました。

家族とは？ 人間らしさとは？ を心の中で問い直しながら会場を後にしました。そのことを強く考えさせられるのがラストシーンの真っ黒な空に光る火花！ さすがです！ われらの山田洋次監督の演出。このシーンがないとぼんやりと帰路についたかも知れませんが。誰の悩ましい日々にも、新たな出発があるという力を与えてくれる作品でもあります。一人でも多くの人に観ていただきたいと思います。

下町の温かさに、変わっていく家族の物語。 人とのつながりが地域を支える。

豊中市長 長内 繁 樹



とよなか山田会の皆様には、本市の名誉市民である山田洋次監督の顕彰に多大なご貢献をいただき、心から御礼を申し上げます。

この度、市民の皆さんに山田監督を身近に感じ、本市への愛着と誇りをもっていただくため、90本目の監督作となる「こんにちは、母さん」の先行上映会を開催させていただきました。上映会のチケットは即日完売し、当日も会場全体が笑いに包まれるシーンが何度もあり、ご来場の皆さんが楽しんでくださった姿を見ることができて、大変嬉しく思いました。



今作は、地域に出てボランティアをしたり、恋愛をしたりと活発な母の姿が印象的で、今風の令和の母が描かれていました。もし、私の母が70歳を過ぎて恋愛をしていると聞いていたら、作中の息子のように、びっくりして反対していたのではないかと思います。そんな歯がゆい気持ちを代弁してくれている様子や温かい下町の住人、新たな母との出会いを通じて、少しずつ変わっていく家族の物語を楽しませていただきました。

また作中で描かれた下町の描写には、どこか癒される親近感のようなものも感じました。実家で行われるボランティアの会議にご近所さんが集まり、お巡りさんも一緒になって交流を深める場面が印象的で、地域で暮らす人同士で密接な関係を築く様子は、地域コミュニティの本来の姿ではないでしょうか。前回のニュースレターでもお伝えしましたが、地域を盛り上げていくためには、やはり、人と人とのつながりが大切です。人と人は、どこかでつながりながら、困ったときには声を掛け合って助け合う、そういった姿が大切であると作品を見て改めて感じました。

人とのつながりが希薄化しているといわれていますが、今、地域でさまざまなイベントが開催され、コロナ前のような賑わいや活気が地域に戻ってきています。今後も、山田監督の作品のような人と人がつながり、支え合いながら、更に活気に満ちたまちとなるよう取り組みを進めていきたいと思えます。

最後に、山田監督91作品目を楽しみに、またここ豊中の地で先行上映会をできる日を願っています。

8月24日
豊中市
文化芸術
センター



逸郎の映画三昧

山田洋次監督の映画を観る③

田中逸郎



田中逸郎さん

元・豊中市副市長
NPO政策研究所理事

監督の台所を覗く——表現活動の源泉、そして決意

これまでの2回の映画評で、観客の胸の中の燠(あつき)に火をつける、つまり私たちが見失いつつある大切なことを、山田洋次監督は笑いとペーソスに包んで届けられていくと述べてきた。

もちろん、映画ファンなら誰もが魅入ってきたとおり、作品は喜劇だけではなく、シリアスなドラマもある。時代劇もある。さらには、映画へのオマージュと自身の体験を重ね合わせた作品もある。脚本も書け

ば、芝居の演出もしている。その多彩な活躍と作品数には驚くばかり。松竹の興行を支えるエンターテイナーとしての役割を果たすと同時に、鋭く時代や状況に切り込み、深く心に染み入る映像作品を紡ぎ続けてきた。

この多種多様な表現活動の源泉は何か、どのように自身を鼓舞し、また折り合いをつけながら、今なお作品をつくり続けているのだろうか。これが今回のテーマ。いわば、台所に押しかけ、料理づくりの様子を覗き、レシピの秘密を探ってみようという試み。さて、どうなることやら。

寅さんが結婚できなかった理由……監督もつらいよ

まずは、前回からの宿題を片付けよう。作品は『男はつらいよ 寅次郎ハイビスカスの花』。寅さんとリリーは、なぜ結婚という「ゴール」に至らなかったのか。

過労で倒れたリリーのいる沖縄へ駆けつけた寅さんは、青い海と抜けるような空の下で、リリーと暮らし始める。

夕暮れ時には間借りした民家の母屋から沖縄民謡が聴こえてくる……温かい周りの人々の支えもあり、リリーの病は癒え、二人のきずなも深まっていく。舞台装置はそろった。さあ、いよいよ二人は結婚するのか……。

二人の恋の行方をまな板に載せた山田洋次監督は、結婚へと成就する料理には仕上げなかった。寅さんのしあわせを誰よりも一番願っているのに。何故か。沖縄に癒され幸せを手に入れる、それではあまりにも安易で沖縄を都合よく消費する、いわば観光客向けの料理になってしまっただけだ。たとえば戦後の闇市を彷彿とさせる公設市場周辺での庶民の暮らし、突然空を切り裂く米軍軍用機の爆音、寅さんも加わるカチャーシー(民謡に合わせてみんなで踊る)、リリーが職を求めて訪れる歓楽街などのシーン、これらの食材をもとに薄っぺらな料理に仕上げるわけにはいかない。戦争で玉碎を強いられた沖縄民衆の苦難の歩み、本土と沖縄との格差構造を嗅ぎ取る舌(感性)を持つベトナム料理人・マエストロなのだから。寅さんもつらいが、監督はもつとつらかったに違いない。

だからと言って、声高に反戦を訴えたり、癒しの島・沖縄という本土による囲い込みを直接的に告発したりはしない。それは山田洋次監督の料理作法ではない。他の喜劇作品にも通底している独自のレシピ(表現手法)があるはずだ。それを探ってみよう。

「喜劇における料理作法……笑いが持つ解放的な力」

次に『家族はつらいよ 妻よ薔薇のように』をつまみ食いしてみる。この作品は主婦の家出騒動を描いたものだが、当然のことながら、単に面白おかしく描いた喜劇ではない。無理解な夫への主婦の葛藤から、日本社会の病理を浮かび上がらせる。男は「猪突猛進」とばかりに外で働き、女は「銃後の守り」のごとく子育て

第25作「男はつらいよ 寅次郎ハイビスカスの花」
(C)1980 松竹株式会社



てや家族のために尽くす。戦後、本当に日本は変わったのか。一体、わたしたちは何に向かって懸命に生きてきたのだろうか。家族に囲まれているというのに、心は満たされない。

「ここでも時代や状況を声高に告発するのではなく、家族の騒動から戦後の高度成長のひずみをあぶり出す。まるでコントのようなドタバタ騒動とシリアスな社会問題、この一見相容れないような二つの食材をもとに料理を作り、盛り付けていく。これが山田洋次監督の喜劇作品の特徴。笑いと風刺というスパイスで自己・家族・世間・社会をつなげ、哀切で痛切な人間模様

「妻よ薔薇のように 家族はつらいよⅢ」
(C)2018 松竹株式会社



仕上げていく。だからみんな、笑いながら涙が滲んでくるのだ、これは私のための料理・私の人生を描いているのだ。

さらにもうひとつ、この作品には深い仕掛けがあると思われる。作品タイトルにある「妻

よ薔薇のように」から推察するのだが、「ご存じだろうか、『薔薇の名前』というシモン・コネリー主演の映画にもなった小説を。厳肅な修道院が、アリストテレスが書き残した書物を禁書にしたことから始まる物語である。都合の悪いことは隠蔽する、どこかの政府のような修道院が恐れた書物、そこには「喜劇」が書かれていた。修道院は「笑いが持っている解放的な力」による権威の失墜を恐れて禁書にしたのだ。

そういえば、圧政を笑い飛ばす歌や踊り、芝居が日本各地にも残されている。自身を支え生きるための知

恵と源泉、それは笑いだよと、こうした古今東西の民衆文化をもとに『妻よ薔薇のように』を差し出しているのではないか。『男はつらいよ 寅次郎ハイビスカスの花』で、沖繩の人々が歌い踊り、笑うことで厳しい現実を生き延びてきた姿を描いていたように、山田洋次監督のすべての喜劇作品に通底しているレシピ・哲学ではないだろうか。

矜持と決意……ちくわを買ってくれたおばさん

この「ちくわを買ってくれたおばさん」とは、朝日新聞連載中の「山田洋次夢をつくる」という氏の連載エッセイのタイトルから（2023年2月25日、朝日新聞 *be on Saturday*）。山田監督の創作の源泉がわかるので、要約して紹介する（ぜひ、全文を手にして読んでいただきたい）。

同エッセイの前半部分では、少年時代の思い出が語られる。中学生の山田少年が、学費を稼ぐために自転車の荷台にちくわを積んで売り歩いた時の出来事。ある日、競馬場にある屋台のおでん屋に、大量に残ったちくわを売りに入ると、おでん屋のおばさんは、山田少年が大陸からの引揚者であることを聞き「残ったちくわを全部置いていきなさい」「さらに「明日から、もし残ったらここに持っておいで。おばさんが全部引き取ってあげるけん」と言ってくれた……山田少年は、荷が軽くなった自転車を漕ぎながら涙が止まらなかった。今でも思い出すと目頭が熱くなると書かれている。中段では「大学生になっても、生活という課題、いかにして食べていくかというのは僕のテーマ」だったとし、周りの裕福な若者との違いを感じながら「映画界に入った第一の理由は食べていくため」と記している。同期入社の仲間には、あの大島渚ら新しい映像の世界をめざす俊英たちがいたという。

こうした実体験から「生活する、いかに生きるかと

いう課題、このリアリズムの世界から抜け出せないのは僕の特徴であり、限界でもある。そこから離れて、美や空想の世界になかなか行けない。そんな世界が描ける人たちがうらやましい。それは今に至るまでの僕の悩みです」と言っ。そして最後に「ただ、監督にならずっと思い続けているのは、あのおばさん、競馬場の屋台で働いていたあのおばさんを見て「訳がわからないよ」というような映画は決して作りたくないということ」で終わる。

いかがだろうか。山田監督の多種多様な表現活動を貫く思いや立ち位置、さらには悩み、そして矜持と決意が伝わってくる。もう、なにも付け加えることはないだろう。

さて。次回では、戦争を知らない世代への遺言ともいえる『小さいうち』、時代劇『たそがれ清兵衛』など、喜劇以外の作品群にふれてみたい。いずれも、時代閉塞状況の中、解放へと歩み始める女性たちが描かれている。そういえば、8月24日に豊中で先行上映された『ごんちちは、母さん』もそうだ。

「山田洋次監督の映画を観る」4回シリーズを締めくくるエピソード編にふさわしいのではないか。

「たそがれ清兵衛」(C)2002 松竹株式会社



私が好きな作家三浦綾子と山田洋次監督

林 貞子



林 貞子さん

●1935年生まれ
キリスト教徒 同志社女子大卒
耳鼻咽喉科開業医の女房を天職として50年共に働く(閉院)
NPO法人 枚方・交野国際奉仕活動協会H-I-K-I-V-A(ヒキバ)会
員としてネパールの人たちと交流

デイサービスの利用者に歌集を作る

重度のリュウマチを患う独居老人のTさんとは、三浦綾子作品の愛読者というきっかけで知り合いました。Tさんはほぼ毎日通われるデイサービスのノートに、辛うじて握れる鉛筆で短歌を書いておられました。あまりにも寂しいこの方に、何かお慰めはないものかと思っていたのですが、唯一の楽しみで作っておられる

三浦綾子



短歌で歌集を作っておけることを思いつき、素朴な歌300首ほどの小さな手造り歌集「星に祈りつ」が出来上がりました。

泣いて喜ばれ、「これをあのお方に差し上げたい」と言われるのです。びっくりし、ちょっとためらいもしましたがTさんの切なる願いでしたから、あて先は「北海道旭川市 三浦綾子様」と書き添って投函しました。幾日かしてTさんからすぐ来てほしいとの飛脚が走って来られたので伺ってみると、何と、「差出人三浦綾子」の分厚い封筒を握りしめておられました。おそらくは「星に祈りつ」全部に目を通されて、特に印象に残ったもの何首かをあげられて、その自筆の感想が書かれた分厚い封書でした。有名な作家であり、病身を抱えつつも超お忙しい中から、見ず知らずの遠隔に住む年寄りに、このように心をかけ時間をかけて返事を書かれる誠実さに驚きました。

『胸を躍らせて何日も前から待っていた山田監督は、想像どおり温かさに満ちた人柄。対談は「北海道新聞」紙上に、数日掲載の予定。』このような小説を読みたかったのです」と氏は小説「銃口」に触れてくださる。私にとって最高の讃辞なり。『難病日記』より』

小さくされている人に注がれる眼差し
私は山田洋次監督の映画 寅さんシリーズは昔から大好きで、これまで何度も見てきました。最新作「こんには、母さん」も初日に行きました。おもしろい中にも考えさせられ、素晴らしい作品と思います。私の心を占めている「両人に共通していること、そしておそらくは終生ファンであらせたいだく理由は、「小さくされている人に注がれる眼差し」がお二人に共通するテーマに思えるからです。

私と寅さん

子供の頃に寅さんの映画をみて、のんびりした風情と人情が心地よいと思っていました。その映画の監督が豊中出身で生家が最寄り駅の岡町に残っていることを知ったのは大人になってからです。文化芸術都市、豊中に生まれ育った身の上にありながら何という不覚！

北山洋平



北山洋平さん

●1984年生まれ
大阪生まれ、豊中育ち 小学生と幼稚園児の2児の父です。
熊野田幼稚園・豊中市立泉丘小学校・豊中市第十七中学校
大阪府立箕面高校・大阪工業大学・大阪工業大学大学院(電気)
一般財団法人日本品質保証機構 勤務

なんだかんだ言いながら、

最終的に皆で助け合って暮らしている

グローバル競争が日常生活にまで影響を与える慌ただしい今日この頃。『男はつらいよ』をみると人間が本来持っている時間感覚や生活のペースを思い出させて

くれます。あと、なんだかんだ言いながら、最終的に皆で助け合って暮らしている姿をみると今の社会が忘れかけている大切なことを思い出させてくれます。甥





の満男の家庭問題が映画に登場しますが、今の不登校問題やいじめ問題に対して寅さんならどう考えるのでしょうか？ その答えは今の社会を生きる人が寅さんになって答えを出すしかないのだろうと思ってます。

お正月映画で寅さんが上演されなくなってから
これから人口が減っていく社会では人を大切に育成していくことの方が利点が大きいと思います。本当に

人間性の孤塁を守る寅さん

西村美智子



西村美智子さん

●1931（昭和6）年8月8日生まれ

東京都立大学大学院英文学専攻文学修士

塔短歌会会員

歌集『邂逅や（わくらばや）』

1969年、私は寅さんの虜になった

1969年、38歳の寅さんが38歳の私の前に現れた。以来私は寅さんの虜になった。限りなくダメ男で限りなく耀く寅さん。上昇志向がメラメラと鬼火のように燃え、有用性のみがひたすら求められ、行き着く先はA-1かという世の中で、寅さんは強烈なアンチテー

人手、人材不足です。さらに実力主義、個人主義が進みました。協力や団結することが減り、日々心労を感じながら働いているのが現在の労働者諸君の姿だと思います。

お正月映画で寅さんが上演されなくなってから世の中がギスギスしだした気がするのは私だけでしょうか？ 多くの人が寅さんの存在を思い出せば世の中が明るくなると思います。

ゼとして人間性の孤塁を守る。

私は今もテレビで何十回目の寅さんを観ている。ありがとう。寅さんを生んでくれた山田洋次さん。ありがとう山田洋次さんを生んでくれた豊中の街！

豊中を舞台にしたミニコミ紙

これまで西井弘和の出した二つのミニコミ紙、「どいボラはっぴいニュース」「よなかの星たち」。

世界は素朴で美しく、人々はその世界に値する生き方ができるのだと思わせた。

豊中を舞台にしたミニコミ紙は、送られて来るのが楽しみでどんなに私の慰めになったろう。豊中に行っただことのない私に、四季の美しさ、繰り広げられる行事の豊かさ楽しさ、住む人びとの魅力がぐいぐい迫って来るようだった。

西井は、同志社予科の学生の頃、青春謳歌の小説を書き上げた。それはまさに光に満ちた作品だった。敗戦間もない昭和20年代。その明るさは私たちを驚嘆させた。



私は一種の文学グループの同人であったが、彼の文学の世界への進出を信じた。しかし彼は実業の世界に進み、波瀾万丈の末、文学にもどり、『町人剣 たかのみや晃造』で学研社の文学賞を得た。人間肯定の力みなぎる作品であった。

人間肯定の人間賛歌

山田洋次監督の『男はつらいよ』も究極は人間肯定の人間賛歌であろう。理想の女性を求め、ドン・キホーテのような永遠の放浪を続ける寅さん、柴又のユートピア、いずれも深い人間肯定に根ざすものである。柴又はすぐれてリアルな下町風景であるがあのように善人ばかりの町は現実にはない。

この豊中の生んだ偉大な芸術家山田洋次をとりあげることのミニコミ紙も、その延長線上にあると思う。

山田洋次昭和6年生。西井弘和昭和5年生。西村美智子昭和6年生。戦争を生き平和憲法を守って生きた同時代人であることが嬉しい。



STORY

小さな茶の間を、大きな時代が通り過ぎていく——
巨匠・山田洋次監督が、吉永小百合主演で描く、
激動の昭和

昭和 15 年の東京。野上佳代（吉永小百合）は夫の滋（坂東三津五郎）や 2 人の娘と仲睦まじく暮らしていた。しかし、戦争反対を訴えていた滋が治安維持法で検挙されてしまう……。

黒澤明監督作品のスクリプターとして活躍した野上照代の自伝的小説を原作に、激動の昭和初期をたくましく生き抜こうとする 1 人の母の姿を通して家族の素晴らしさを描き出す感動ドラマ。

監督：山田洋次

出演：吉永小百合、浅野忠信、檀れい、志田未来、佐藤未来、坂東三津五郎、笑福亭鶴瓶ほか



10/20
(金)

とよキネマ Vol.55

とよなか山田会 Presents ★

「母べえ」上映会

山田洋次監督、吉永小百合さんが主演された「母べえ」が、豊中文化芸術センター・アクア文化ホールで上映されます。ぜひ、この機会にご覧ください。

編集後記

- 気軽なご投稿を、下記編集部までお送りください。文字数 500～800 字。氏名年齢職業明記。編集等はお任せ願います。
- 次号発行は、1 月 10 日です。ご投稿は 11 月 30 日までをお願いいたします。お気軽にどうぞ。



●編集部／西井弘和
〒 561-0865 豊中市旭丘 1-4-303
☎ 06-6843-6700
メール／h-nishi77-100@ab.auone-net.jp

- 【開催日時】** 2023 年 10 月 20 日 (金)
① 11:00 ② 14:30 ③ 19:00
- 【会場】** アクア文化ホール (中ホール・全席自由)
- 【料金】** 一般／1,000 円 (club CaT / 900 円)
ペア／1,800 円 (club CaT / 1,600 円)
- 【チケット取り扱い窓口】**
 - 豊中市立文化芸術センター チケットオフィス
TEL:06-6864-5000 (10:00～19:00/月曜休館)
 - ローソンチケット[Lコード:52459] <http://l-tike.com/>
- 【問い合わせ】** 豊中市立文化芸術センター チケットオフィス
TEL:06-6864-5000